経済論叢（京都大学）第176巻第4号，2005年10月

〈追憶文〉

# 大野英二先生と神話

本　山　美　彦

先生にとって，私は孫だったのだろうと思う。お弟子さんたちは子供，それこそ，弟子という子供には厳父そのもののお人でした。ところが，私には「よくきた，よくきた」といつでも歓待して下さった。先生宅の応接室で，「音楽のポリフォニーは，西洋の教会音楽よりもさらに古くからアジアにはあったそうです」。私が乏しい知識の中から偉そうにいうと，先生はすかざず，「自覚的に記譜する理論の存在が重要だ」と攻め込まれる。そこで，もう一度出直しますとお宅を辞し，懸命に新たな知識を詰め込み直して，再度お宅を訪問し，「文法を意味するグラマーとはヒンズー語で記譜のことだそうですよ」，との反論をする私に，先生はさんざんワインを飲ませ，フラフラになった私の一夜づけの知識を眼を細めて楽しんで下さった。それでも，けっして，知識の乏しさを冷やかされなかった。ただ，ニコニコと会話を楽しんでくださった。本当にそれは慈父の目であった。そして，バッハとモーツアルトしか聴かない私を教育しようとして，必ず，シェーンベルクとワグナーの新しさを熱く語られた。

私にとって，不協和音でしかない，ソーメンのような音の反響に心の中で悲鳴を上げていたら，その困った私の顔を楽しそうに見ておられるのが常であった。

お宅では音楽談義の後，必ず，神話の話をされた。とくに河合隼雄先生の神話論がお好きであった。100年ももたなかったマルクス主義に対して，神話は太古から我々に啓示を与えてくれる。三大宗教も，何千年と続き，人々にパッションを与えくれる。そうしたことを語られる先生の感覚を私は私なりに楽しんでいた。

いまでも，鮮明に覚えているのは，ディオニソスのことである。ギリシャ

神話では，ディオニソスはゼウスの子である。ディオニソスに宇宙の支配をまかそうとゼウスはしていたが，タイタン（巨人）族たちによって，ディオニソスは，八つ裂きにされて，殺されてしまった。そのとき，ディオニソスは身を隠すためにに牡牛に化けていた。そして，ディオニソスが化けていた牡牛の生肉がタイタンたちによって食われてしまった。しかし，ディオニソスの心臓だけは無事であった。怒ったゼウスはタイタンたちを雷で焼け殺した。心臓をタイタンから隠し，心臓を嚥下し，ディオニソスの灰を食べた人間から第二のディオニソスが生まれた。そしてディオニソスが，人間を生み増やした。だからこそ，人間には，人間性とともに，神性が宿っていると言われるようになった。そして，第二のディオニソスが闇の帝王になり，荒ぶる神となった。

しかし，後年，時代が下るとともに，ディオニソスは，牙を抜かれた温和しい神として，アポロ神殿でアポロ像の向かいの壁に描かれるようになった。

東方では，ディオニソスは生きた動物を八つ裂きにして，その生肉を喰らい，生き血をすする荒ぶる神であった。それが生け贄を生んだ。人々は，ディオニソスを祭る儀式で，生け贄を八つ裂きにし，生き血をすすることによって，荒ぶる魂のエネルギーを得ることができると信じた。

ディオニソス信仰が西方に伝わる過程で，生肉はパンになり，生き血はワインになった。破壊の神が豊饒の神に模様替えされたのである。そして，荒々しいディオニソスは，アポロンと向かい合う温和しい神にされてしまった。

キリスト教の聖餐式は，東方の古代の儀式を地中海風にアレンジし直したものである。では，東方からさらに，東，つまりミトラ教になればどうなっているのか。コンスタンチヌス大帝がキリスト教を公認したとき，自らの軍旗の XP（ローマ字では k と R のこと）をイエスの旗とし，イエスの誕生日をミトラ神の誕生日の12月25日に変えたことは何を意味していたのか。そもそも，アレキサンダーのヘレニズムのギリシャへの巨大な影響力は案外軽視されてきたのではないのか。

こうした会話が延々と続けられた。ワインで酔っぱらいながら，私たちは宗教談義に明け暮れた。そうすることによって，技術に堕落する経済学への

怒りを共有できた。

先生の独特の字体のお手紙は，いつも，先生から宗教談義をもちかけられるものであった。

わたしは，今後，宗教社会学に向かう。その決意を込めて，宗教的雰囲気が残っている福井の地に赴任する。私は，それほど大きな影響を，大野先生から受けている。